

# フィールドの活用と保全における博物館の役割

岡崎 浩子<sup>1)</sup>・松島 義章<sup>2)</sup>

## 1. はじめに

日本第四紀学会シンポジウムでは、大学教育、高校教育、地質研究機関、文化財行政、市民活動分野から来られた方々がそれぞれの立場で「フィールドの活用と保全」について大変興味深い内容のお話を述べられた。自然系博物館はこれらの分野の方たちと「フィールド」を通じて直接、関係することができる機関である。講演をうかがいながら今後、フィールドの活用と保全について、これらの分野の連携がすすめられていく際には、博物館は重要な橋渡し役を担えるであろうことを実感した。このことについて簡単なコメントを述べさせていただきたい。

## 2. 博物館活動とフィールド活用と保全

博物館では、調査研究・資料収集・整理保存・展示・教育普及という言葉でまとめられる多様で広範な活動を行っている。特に自然系博物館にとってこれらの活動は、いずれもフィールドの活用なしでは成立しない。すなわち、資料の収集はフィールド調査とともに行われ、その採集された資料は、整理保存されて展示として公開されたり、または観察会などで現地で解説されたりする。当然のことながら、これらの活動はフィールドが良好に保存され継続的に調査が行われることによって、より大きな成果をあげることができる。



写真1  
インパーロック(オーストラリア、  
ビクトリア州)の化石発掘風景。

1) 千葉県立中央博物館  
2) 元神奈川県立生命の星・地球博物館

キーワード：フィールド、活用と保全、博物館、連携





写真2 (左) 国指定天然記念物木下貝層(千葉県印西市木下, 更新統下総層群木下層)。ここでは、貝層と町の歴史などの関係を含めた活用が検討されている(大原ほか, 2004)。

(右) 木下貝層を使った江戸時代の灯籠。



一例としてオーストラリアの博物館が行っている化石発掘調査を紹介する(写真1)。調査地点はオーストラリア南部のインパーロックと呼ばれる海岸でタスマニア島の対岸に位置する。ここはオーストラリアでも有数の白亜紀の化石産地で、地元のモナッシュ大学付属博物館の研究者らが中心となって、発掘調査が10年以上続けられている。参加しているのは大学教員や学生のほかに地元の教員やアマチュアの実験者らで、我々のような外国からの研究者も含まれている。毎年、夏に調査期間が設定されその間合宿生活をしながら調査が行われ、研究交流が図られている。休日には発掘地点で地域の住民への観覧会があり、調査方法や採集された化石の解説が行われ、皆、熱心に聞きいっている姿は我々が行っている観察会が思い出されて楽しかった。ここで発掘された化石資料は基本的には付属博物館で展示されるが、その一部は日本やアメリカなどを巡回し「オーロラをみた恐竜たち」(福井県立恐竜博物館2003年特別展)として世界に広く紹介されている。このような例をここであげたのは、世界的にも第一級の化石産地のフィールドであるが、そこでの調査方法や地域住民や行政に対するスタンスが我々の行っている活動とよく似ていて大変驚くとともに共感を持ったからである。

このような1つのフィールドを拠点とする総合調査

は、たとえば滋賀県立琵琶湖博物館の琵琶湖調査のように博物館が中心となって総合的継続的に行われているものもあるが、このような例は実はそれほど多くない。博物館として継続的にフィールドを活用・保全するには、フィールド調査によって資料や研究データを収集し研究基盤を固めると同時に、その地域の学術的意義や保存の重要性を、行政や地域に常にアピールしていかなければならない。行政と地域の理解が得られてはじめて継続的な調査体制を整えていくことができるといえよう。博物館はもともと文化遺産の収集と保管が出発点であるが、現在はいろいろな形態の博物館活動が行われている。たとえば千葉県立中央博物館の「山のフィールド・ミュージアム」プロジェクトでは、房総の山の自然やそこで育まれた文化そのものを“資料”や“展示物”と考え、地元の学校の空き教室を利用した、建物をもたない形での博物館活動を行っている。これは究極の地域博物館ともいえ、地域社会の生涯学習活動と密接な関係の上に成り立っている。

フィールドの保全には行政や地域の住民、関連研究機関などの連携が重要である。行政的な保護の第一級のものは国の天然記念物指定(写真2)であるが、地方自治体レベルでも自然保護地域や天然記念物の指定などにより、自然保護やフィールド保全への取り





写真3

クジラ化石発掘観察会風景  
(千葉県君津市市宿)。更新統  
上総層群市宿層から非常に保  
存のよいクジラ化石が発見さ  
れ(木村ほか, 2004)。採集と  
ともに観察会が行われた。この  
化石は現在、千葉県立中央博  
物館で展示されている。

組みは行われている。博物館はこれらの基礎調査を担うことも多い。また、このような調査結果を基に行政、市民、研究者などが一体となって地域の自然保護・保全を考えていくケースも少なからずある。これにはまず行政側に保全を行おうとする明確な意識があることが第一だが、同時に上記の三者にそのフィールドに対する共通理解と認識が必要である。そのためには、博物館は常に中立的で広範な視野にたった情報を提供すると同時に、連携の重要な橋渡しの役割を担わなければならない。

### 3. 博物館ボランティアと博物館友の会

博物館の友の会やボランティア活動は博物館活動をサポートする強力な力になりつつある。一例として神奈川県立生命の星・地球博物館を紹介する。館のボランティア体制は、活動内容から博物館ボランティアを、学芸ボランティア、館運営ボランティアと展示解説ボランティアに区分されている。学芸ボランティアはその活動を通じて学芸員の知識や技術を得て自己学習の向上と研鑽を図ることとした。そのため学芸員の専門に関する分野となり、植物分野では維管束植物・菌類、動物分野では哺乳類・魚類・昆虫・貝類・鳥類、地球環境分野では地学・リモートセンシング、古

生物分野では貝類化石・微化石となる。館運営ボランティアは博物館学、ミュージアムライブラリーと友の会の3分野で、展示解説ボランティアはスポット解説と誘導・案内の2分野で構成される。2005年度の登録人数は230名(男性114名、女性116)と活動状況は延べ活動人数2,680名となる。博物館友の会は博物館を広く活用し、博物館活動を支援すると共に会員相互の交流を図ることを目的に発足し、2005年度の会員数は正会員594名、賛助会員4名となっている。その活動は館との連携・支援・共催など多岐にわたる。具体的には館を核としてフィールドを教材に、地学グループ、自然倶楽部、昆虫探検部、植物グループ、オープンラボのサークルで活動している。これら多くの会員とボランティアの人たちが野外調査や観察会、見学会などで得られた情報を館に知らせてくれることで、学芸員の目が行き届かないフィールドをカバーすることができ、地域博物館としての存在を示すこととなっている。たとえば、最近、造成工事に伴い貴重な露頭が消滅する直前となっている情報を得、直ちに現場へ出かけ業者の了解のもとで露頭の剥ぎ取りを行うことができ、現地の調査記録とともに剥ぎ取り資料として博物館で収集することができた。このようにして博物館を中心として育てられた地域社会のフィールドへの関心は、たとえばジオパーク認定活動などに



は大きな力になると考えられる。

#### 4. 博物館と学校教育

博物館として、フィールド活用の最も大きいものが「野外観察会」である。毎回、多くの参加者がある(写真3)。親子連れも多く、休日を親子で自然に親しみながら楽しんでいる姿がよくみられる。一般的に博物館の観察会ばかりではなく、教育関係の民間会社などが行う自然体験ツアーのようなものも人気が高い。よく言われるように地面に触れたこともない子供たちが増えてきているのは事実だろうが、このような姿をみるかぎり子供たちの自然に対する興味が薄れているとは思われない。問題はこうにして芽生えた興味が、どこまで学校教育の中で伸ばされていくのかである。博物館の観察会や講座の中で中・高校生への参加はきわめて少ないのだが、シンポジウムで都立高校教諭田村糸子さんから自然教育の困難な状況をうかがって納得をした。すなわち、たとえば地学のように学校のカリキュラムの中でも学ばない分野に対して関心が低くなるのは当たり前だろうし、また、休日でも部活動や補修授業などで忙しい生徒たちの足が、野外や博物館などに向かないのも当然だろう。しかし、博物館の学芸員の中には子供の頃に博物館の事業に参加し興味をひかれ、それが高じて今日に至っている人も多い。現在、分類学など博物館が主体となって担っている分野も少なからずあり、このような自然教育の衰退は将来の学問分野の消失にもなりかねない。

社会教育施設としてスタートとした博物館は、現在では生涯学習施設の中核をなしている。その一方で

博物館と学校教育との連携もしばしば話題になるが、出前授業や個別の課題指導などを除き、システムとして学校連携を行っている博物館は多くはない。生徒たちの移動や授業時間の制限、講師派遣の際の持ち出し資料の限界などの多くの問題があり、実施できる学校が限られてくることが原因である。また、SSH(スーパーサイエンスハイスクール)やSPP(サイエンスパートナーシップ)など特別な枠での学校連携は可能だが継続性がない。「フィールドの活用」を通じて学校教育と博物館との連携のとれた確かな学習支援活動の必要性を感じる。千葉県では「千葉県の観察に適する露頭30選」(千葉県地学教育研究会)や「鍵層集」シリーズ(千葉県立中央博物館)など露頭資料をまとめたものを出しているが、このような活動がいずれは自然保護やフィールドの保全につながっていくにちがいない。

最後に、資料の収集保存はもとより博物館活動は上記のように多岐にわたっている。この多様性がいろいろな分野との連携を可能にしている。地道な基礎研究や地域研究を行うことができる博物館は「フィールドの活用と保全」に対して、さらには地域文化の活性化においても“要”の役割を果たすことができることを重ねて述べておきたい。

#### 引用文献

- 木村敏之・伊左治鎮司・岡崎浩子(2004): 千葉県の中部更新統市宿層より産出したヒゲクジラ類化石の産状。化石, (76), 1-2.  
大原 隆・桂 雄三・岡崎浩子・黒住耐二・大野康男・伊藤哲之(2004): 文化財と地質学—天然記念物木下貝層化石観察ウォーク。日本地質学会第111回学術大会見学旅行案内書, 177-188.

OKAZAKI Hiroko and MATSUSHIMA Yoshiaki (2007): Museum activities on fields.

<受付: 2007年9月5日>